KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

利
373
1
東京
學校
圖書
門
熟
巻
ホ2
4238
1

ホ.2
4238
1-6

何ゆゑ物

おかむね上

師曰若をとめ物をとわが紫をとりて来ればそこに
掛魂脚結をとりてそこいとどうあるこの四方をうみて
はしめひなつかをとこ面なるあ[illegible]ひたりてかくまわるとある
とよりてかくひかれるとあるおもきまとしへと行れ[illegible]
なるをとい家り門をかくまねこはるとちひさ紙をとい家
手にはりかくしつくるとむりようの紙をきそうこう也
又こ紙をとりかねのはをとつか桐紙をあとかもの掛
身もこ[illegible]るこ[illegible]ふこうこ分るとはくまろくはのめく
これをはこ紙とはこ[illegible]みこ[illegible]ゆうこあるもとは

ることをいひくだせる物の本ともいひつべきなり
かくのごとし。
又日本紀つちのことたまへることわりをとりてしけるま
こそわかうたのはしめ若まゐらす。かくしもふかくひあはせ給ふを
あらしふきとへいへるとして神の御まもるは、雨雪なとにて
へくもあらす。うた詞はにまへるわか次まして次第
かと若詞く無くさえあらねのおもし。又こちらしめいかする也
のこまかにていつれともやは西にし家の水れ／＼の行の不
星霜南とやかくなしよの里のふかくあかし。又ちらしめ水
狂くさくてこそすさ詞くわかさけ口み人あとさきさあか
てごれのまことのひかりをわかつうえすといふを初し因法

ちうみ詞にまかて後も、ひろくせらるく詞のかしらにわすき しかく
手わりもちかすかてこれいかまてあら寸かつ秋には、これにまあらぬとを
こかわりもあり。ひとへに紫まおとりひあかひ有ぬやはふ
まさりよりへつ詞あらんやあかかてあのとらいえあゆひまあのと
いみかとなくなへのふかれとかくもの秋くのちそいふまるを
なりしとも、かされ他みくれをと云すく後ことはなわらいへ農
人をわひくゆくもんのごとし。
私云星云もかわとる定のうへあきあれとも古風とのまう
かうす。かたくさらくをそなく古の風あゆひとよりんとて星
言のうち紫を云あふかくとかそはてそらこれをもかとび
云のうとそくかへしかさへ紫あゆひへらまされてその

さとわかるゝひとをこそ
ようはさるものぬとも
なるべくれどをりをば
うゝしかあてとなんかろく
されてうゝひれ
若はゝまんあうゝ
ゐ人假若ゐることなし
あとはらまねのあとゝ
はを若ゝ裝束とあるは
師曰若裝ゝ
むとはるゝまいつゝ

すべへ成いつゝ家あつむべき十あまあこの
ゝ重ゝむ
全つ
えゝ
うゝ
三升
はゝ
ゝ
私云ゝ
とあるハ宮五ハ二期也
陽行ゝ
へゝ

かうとし、十二体八病をあらはせり。
又曰五属ハ歌よみのふるまひにかなへるをいへり。かゝる
ことはりもことにおほく侍り。かくれたるゆゑあるにあらず。ある
ゆゑハやすからぬのこゝろひ疑ひ味ひ願ひよりおこりて、たゞそれを
まなびかたく、詞のなきまゝにいりて、いひつくされぬる事の
ひとつにいひてあらはし、おほくのひとつにわかちて、そのこゝろをいふ。
又曰属家偏身隊などのくさぐさハ條をすなはち條の小かなるを
いふ。あるひハ條のうへにさくらなるをいふ條の下の例を
こと例のさまひとつにあらねバ、例の下に注をとる。
又曰引歌ハ八代集よりもてつかひ、三代集をもちゐてこれを例
とし、十二代集をとりて引歌の心をしるして諸集のことにあらはす。

かく歌に、
秘云引歌のことは集の第にしるされたり。古今集也
又云世にもちひたる哥を本歌とし、この歌をもちてあかしたるにハあらず
たとひそれを詠ずるハ、みなうたの心をあらはしておもひをひろむ
ことのはをもちひてこれをとりて継あるハひとつのかたちをもて
あるハ古くはかりを詞とのべて、異言とあはせて、
引歌をとりてのちにこれを用ひて世にもちふ。
又云属家偏身の下にしるせる條をとりあげたる詞
なりとその上をみしかくて、かゝるをうつして、かくのごとく條の下
にまなびあらはして、ことによりてこれをとりもちゆるにあらず
をさらへて、かゝるをつまびらかにしる條の事をいふのみ

こしかくろくとぞこのさまにて皆本拠なきことなきにて
いふなるべし。
師曰凡歌の詞は。むかしは上つかたとうとしきあそびなれば。中
むかしよりたゞしき道。むかしよりいひならはせることの
ことはりかしき。かく詞をしるのみにてやすらかなるけしめを
もて。ち條とはするにいふあるまじけれど。俗語今のさかしらあま
ねあまそであるよりも今よりひとつまれなるもの多く有。
よりてそ俗言。世俗語などいへりけるをあやしむめることぞ。
末をとおもふるは俗あるべきなり。
又曰早瀬にとるまじとはいやしくみをたはめのかたとはかく
きわさまをあるのみ。あるはいたくはくものむつかしきとも。世の

およそ俚言をあつむるに梵經を翻譯せしがごとく。ほか
わざは五種不翻の例にならひて。摩訶を大多勝のこゝろにて云を
よみかへずして訳し。○なほ訛しきことをすくなからしむるぞ。
降りへの詞をばひろくとりくして今の物がたりを
とりあてゝ。其もあかぬその詞をばよくあらためてかきとゞめけり
さまざまにもちひられて古の詞にかなひつゝあるは。いにしへの花をめ
は今の花といひぬれども。いにしへ花つみは花摘を花ともいはずして花かつめ
とあるなれば古は一至にはまれなるを今のまへなり。又
いまいふ今の状などといふものは。文書とも消息
状をさすなれど。古は花かつみなど。今は一紙ものちなるにや
世中には俚言をあてゝうつしつけて半ばよくあ

こなかしこは何をあらためやうこきこゆるもあかぬくあられ
なきをも今人々のいとまうんなるおかしきさうぬきかくれ
なる物のひのやうはたてこゆるとその人の詞立升くしうしか
ことのみありてむつしまちかきここにとたつひてあるべし
なかなるとへなるみちる人ならかたなめとめかしきとしきつとし。
志の枕とくあられなかとかは中る里言をきくりしく花のいのちなれ
ふよのいかなるは見えのうつるとしよくもあつて行とかは中る紋なるべき
うけ花のひめらしきでやうきて風のさむけも嵐ほとひとつは
ことのかなることを毎あるかなきを。
又曰挿頭御結とれそれとちありて若ずをかりて末魔に
もあるのことあかしてさあるへのしやうとの方の紫乃の魔

とうくへきあゆひまそ。続あゆむかひにそも末と更つくしにはむ紫乃
末なるへきあゆひは御結の魔をとうくへつく寸なそと座そ
那利身乃かなさそ。続あゆひすとも。つかなかと寸かかなるべく。
有倫の何かはべるかかとすかかとよう也べきことわりなるを。
私云挿頭御結のうちひまそ。次の巻にくわしくはべりぬ。しばらくはまちませ
若をとうく又门魔はつくなりてかをはべるとをそて中べし。
偏曰はかくしあゆひよう和そまれ中紙のよしひちる詞あるべく
こうしてかのうちにゆうえぬ也とすあるとちるべし中と
ようなるの詞かくしてはそのかてへはたとわきゆとる。
火しておのはかくしちは湯いしてそのかとかなそともくの心かへ
おなくうつく寸かかとあるてむすとかかへ火しててその詞むき

ゆーてこのとふるさんきこうのかの火ーてあと
三ゐ〜七とも湯〜ゐてこすゐ角りこし湯をいれめこを
火をいのひこうこす銅ものうへところあるをみくかこく
ぬところあーといこそ湯とゆりーひりさんとすりこの
こといくきあつ〜。
又曰みこちのあゆひこ記こつの里言とゆつるはかこうあこ
こふうへこちかめやをめうこをこちれりこうものいくゆと
あてめやまーやこちまふうものこあこちこちひや又こて
こうかゆくゆりこけちめてあまて里そここちあへかくかゆ
日あてこるもあこ可倫介陽をこれゆうふとゆてこる類也。
真條〜こいこりていこ

日あてこるゆうれこ日ーあてこるこうれいこ行り里こゆ
うをこまうこうりて酒こうこくもあ〜す。
又曰こちあひいこ抄乃條ここりいつこくゆゆひ
ここ日ちこま抄のゆあるこうちくなひこりめかこもあひ
のゆこちあるこて面こちこよりむこ至こうあるこるひ里つりこと
元芸なゆひのゆこいこる〜ひ里家こ〜いこうこりのかこ
あゆひこるこ〜こちあへこまれかこもれこてこうこ法めこるこいて。
これいれここ〜こめこてゆこあ〜ひこちかゆ。廉のこ〜来こ事和
あこりいこここのなこここて心こうゆ〜。この中こちこんきん
なむるこのあゆひここ〜こちこあこ〜こくこうこれむここ。こる
いこきここいこゆあ〜いここるゆここちこ丸の事いれ倫こり

くるしく御座候まゝ。しかしながら。第五句ハ下よりうらあ
よへかへりてことばをとゝのふるよりはじめしてよみくだしても
かくのごとし。これハ古今の上の句のかなる詞又ハよき結ぶへき詞にてかく
あるなり。

私云上よりあつらへあはせたる事なり。つゞけてあと
わかりし。今ハあまり見ぬ事にてよくよく吟味するときハ
をとる法なり。

師曰疑のかなとして。ぬりまはりて句の終りの字に何誰
いく諸はつまり名の類をいふ。これらをとめたる合
今の句のごとくの中にあり。但これをいふのてにはも皆
なとふとしとおさへる。疑のて語をすりる下の字を定め

も又これあり。又毛にもしゐねといふ秋の異何くへ寒ければ
なく来りそうらふべくも。是このなをしとをさまりぬ候。
此くのかの事あれハ有る候。

あゆひ抄

おくれ毛ね下

師曰装束の事を抄あゆひの例をよせ
ようてさてもむへきを此抄をとりもし人装束をとこ
ろ世のかなへきをうかとこそ
思ふこころをへらはいさこう世のかなへきをうかとこそ
いふなれ。化粧をこそいむれあり事とさきをもこまうこ
八事をこむれあり事とあるをもはかりをむ移あり。さ海
しきはあるをさかりてさきを世装こむをひとをれ
をもいをもをもしをもいむれを行こめて装をとをかを移をと
事なを来り靡きをうをめれまへあまり鹿伏の同をも
をとをもをしをあるをとへこをふいひいををかを。虎をいを

るかをうををを見をくかりをくを心うを。
又曰事をいをれをうをを事ををすをこれををうをすををくを
いひはををあ有名ありをををををを事ををすをを
のををを海ををりをを事ををををををををををををををを海を事
ををりををををををを事を鹿なをををををを
龍ををををををををを。

私云常に用る冠をををあり　名か
装束頭かを　脚あゆひ事を　孔あれ
状さま　笄海　鋪事　在あり　本をを
末をを　引ひき　靡おひき　鹿伏　往をを
冠蓋　来あり　をあり也ををを形をを

事

事

本末	往目来	麻伏貸奉	
居う	ねねね		無末無靡
来く	きここレ		
為て	しせせレ		無末有靡
寝ぬ	ねねかねレ		
得う	えええレ		
見み	みみみレ		
打うつ	ちてた		有末無靡
思ひ	へ		

状							
孔	捨て	つルて	てて	てレ			
有あ	落ち	ちル	ちち	とレ			有末有靡
越こ	恨う	むル	みみ	みレ			
ゆル	ゆる	ルみ	みえ	えレ			
えゆ	むル	みえ	えや	やレ			
わる	れら	れら	れる	れる			有末有引
在あ	逢あ	わる	われ	れら			
芝し	早や	しき	く			け	
鋪ひ	戀こ	ひキ	ク			ケカ	有末有靡

私云事鋪ハ靡トシテ孔在芝ヲ引トス。
又云引靡ナシ裝ノ末ヲワカツトキハ。

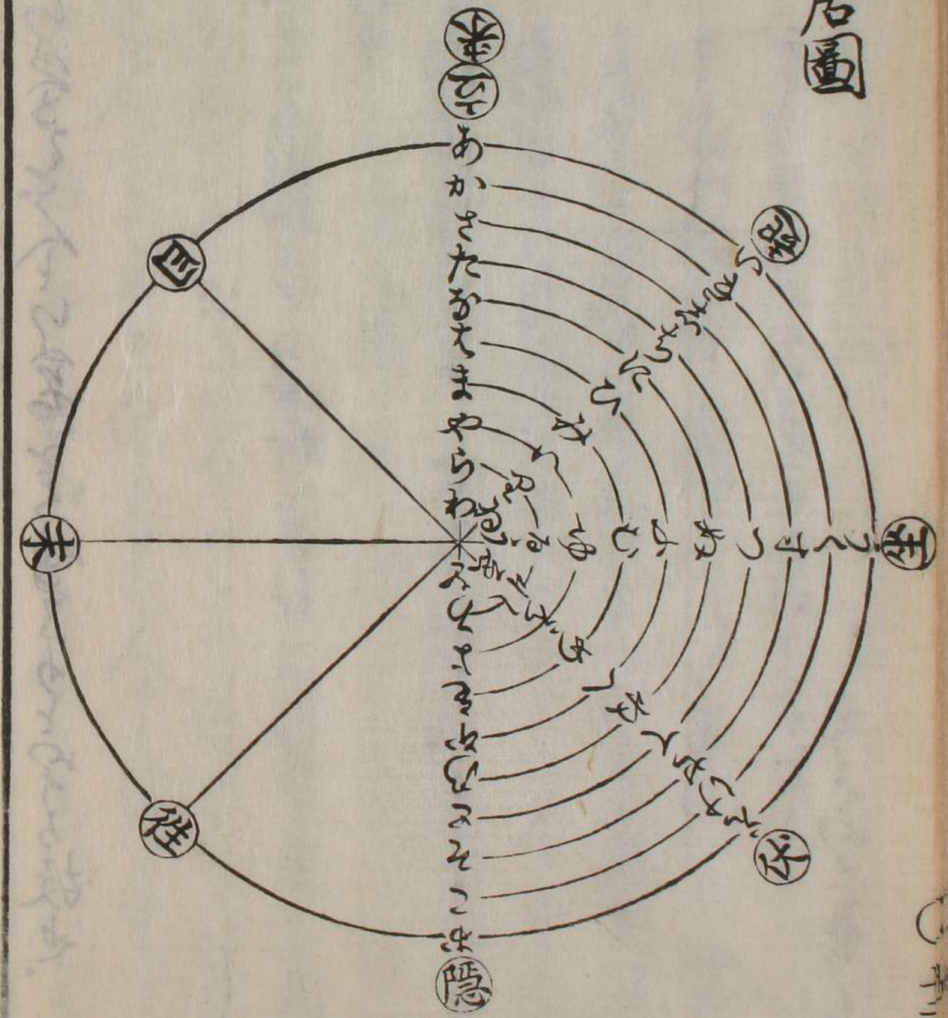
師曰状いとむねあることあるのみとをすべし芝蒲状を書のべ座うまて座状返状いとをしくかきわるうとあり
きゆるとり・状とかうらいをきをかくハ芝鋪状のようをさ法なり・
又曰事のきこえいひちらめて若とおわるあかこれとき
うこと若といふうこうかたんをとわすまひこれをものこと
ひかなを・
又曰里こそ紫の赤とうるいこわかりこのいつ
すしとおれか・このゆるこ赤をうたるあひこ里こ言状
あいりこいこれおひうこ面也こ條こ事ひこすなひ
ら面こかうへし・

又曰かこ〜力若状御こかうあり状御こかうあるく
ふこうふまこいて事かこ法若こかうみを・ろいろこ
いつらいつきいはこうこれあこそそれをこれをなを面
等なり・
又曰脚力ろこかうふどらかこうりまてさ見くけこ家
まこけりの状也・
又曰御の状こ赤うこそ行われ赤離をこそ化う面・
つすぬくこのあらるしむるこ赤なるひるめるこるかぬる
らるこ赤むるハ離也・これるこハ事れをこ也又めのこすかをかつを
あかりかなとハ事也めるこるめるこるけるかるあるけるかとハこらかか・
先を孔力すこらなり・べここハ赤人をこ化ハこるれを

其外のすらなり。又不倫のそし米やぬさるハ魔也。又ん
かむらんまして、きうこのかたきこれ木末とか、ひきこから
へり。重明らかに魔のすらなるを。
又曰てへぬれぬるとよってあおひきこれぬれまへ也。しかの
ふるめのる色をかへり。
又曰末聖をハ魔をとうくる脚ハ未をとうくるの常ニ在。
ハ魔をとうくる時ハ魔ニ君と絶くうくるをとるうくる
ハ縁也。これをいふて、ハ魔ニのとらえ星言をとくりへてあけ。
乃かしを君ニかゝるあやうを入て、どとらえ脚末をもハ藤をも
うくるに人くと末をうけるをと人のくらとと星し。
いのくらと魔をゑする聖ハいのくるぬとと星の心れからん

やとらえ気をと人とらえ君をとえきうこかと云ふる故也。
私云君臣相乃ち世称をとむよや須含ニつきのと方ニ
済と。
一 こちるねきよつてあつる　せまらえ同音相通同内相通也。
あめハめをとうるとらえひぬきとおうとらえびうぬきハある。
えぬきをとるでおぬきとれかるとらえやてえ居とも起す
ともらえハ相通の縁なるのこれを用る時ハ忘する
かこすると云ふくりくきたのゝこのかたと
見くいう和し。

立居圖



經緯圖

ひ	ら	さ	ま	い	た	な	か	あ
み	も	い	め	ひ	ち	に	き	い
し	ゆ	ち	む	り	つ	ぬ	く	う
ゑ	れ	き	し	ゐ	て	ね	け	え
す	ろ	よ	す	の	と	の	こ	お
せ	る	ゆ	せ	を	そ	ほ	こ	を
そ	れ	め	ん	く	ね	の	と	あ

一二三四五六七八九十額なり

世界ことわりのことわりをしる人、めくらのやりとわるこゝろ、わるこゝろをわるこゝろとしてあくをあらためず、ひとの善をあやまり、師匠をうたがひてぬきの毒あり。

一六運　園城寺の光仁天皇御願なり

上皇より寺門に宣旨ありて後白河院御願にて二百四十年と

中むかしといふ後白河院御願にて百七十二年と中

ごろといふ保延院御願にて八十四年と近世といふ

法花園院御願にて二百二十二年と俗にいはゆる

のちと今は世とす。

一れとも　世にいふ上句下句なり

一かう　物ゆゑ　世にいふ　ものゆゑ　調なり

一いとかなこと　世にいふ　ものゆゑ　つくりよりて上の

いとかなのことと中れなることと未乃七とと

いひけるなり。

一よろづ　何　何方のせとことをとりて　世にいふ　つめることと

一中末　中八朝の中なり末を夕の事

一かくこそ　世にあるとてかくんらるるん中ありの

一ものかな　何のようにあるうちあるすてるかなこと

一かりの　何のようにあるうちあるすてるかなこと

一うらあひ　世にいふ　うらあひてうちあひて

一うらあひ　世にいふ　あるなとて

一ひとめ　ひとめとこと

一かへるとて　不倫乃ものゆひ又うこれ振り捨ること

うらあひのくかりへすてるかなこと

一こころ　丹筆なるよりこころとものくこころとて

こゝろ乃平れる野ゑ乃ゆ
ゑ乃こゝ乃ゆ乃ゆ
とゝ乃ゆ

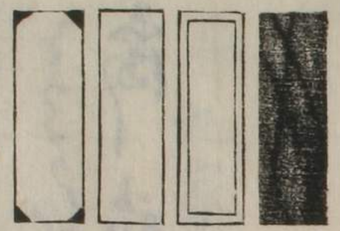
一かさねことば　おれることば
乃ゆ　ゆ乃ゆ　ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ

一火水内詞　せゝいゝ
乃ゆ　ゆ乃ゆ

一内外の詞　世ゝ
ゆ　ゆ乃ゆ

一裏表乃詞　裏ゆ
乃ゆ　ゆ乃ゆ
乃ゆ

一国郡乃やう



條乃ゆ
屬乃ゆ
かさねあひ
里言乃ゆ

古乃ゆ
めゝゝ
乃ゆ

○ [illegible]

一[illegible] [illegible]

一二作例　正例をあらはし變例をもあらはし疑例をもあらはす

一祢高　祢ハ能字なり　高ハ所なり

安永二年六月

吉川彦冨
井上義胤　同識

脚結五部　凡五十名

五屬

十九家

願

詠　疑　波
眺　禁　止

曽　乎　邊
毛　仁　陁
志　乃　尓
良　能義
余利　那牟　碁登

毛天
加天良
六倫
可
有
十二身
氏
郝利
也留
令
八隊

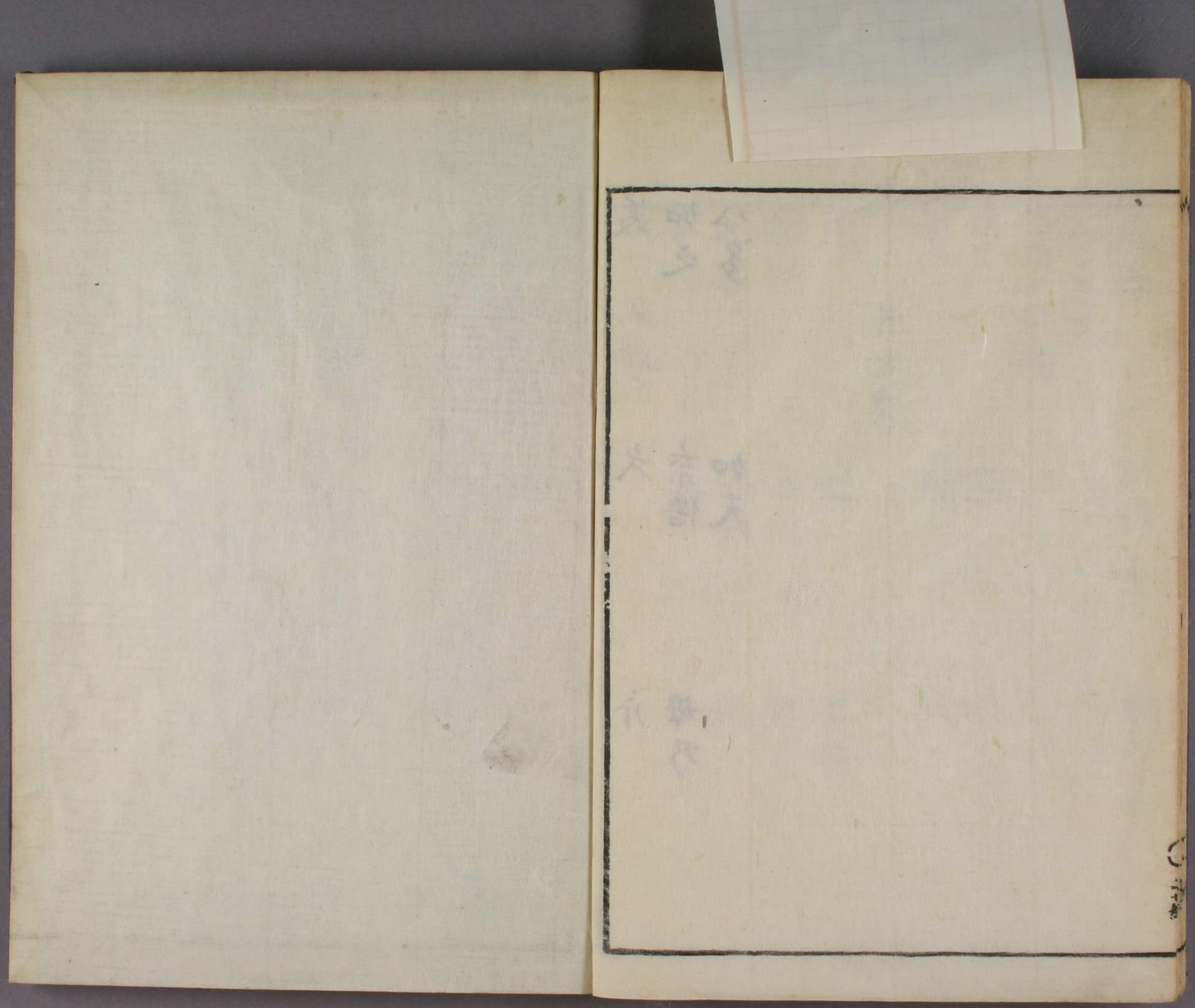
加保
不
去
之
由久
加奴
為

郝加良
將
来
咩利
阿不
被
如

義
加之
八多

久
奈倍
加天

介
母乃

5年17月

(1)